猪俣貞敏

昭和文学の終焉

抵抗文学の系譜

右文書院

昭和文学の終焉

――抵抗文学の系譜――

猪俣貞敏著

右文書院

著者略歴

猪俣貞敏（いのまた・さだとし）

昭和５年１月，神奈川県秦野市に生まれる。

昭和41年３月，早稲田大学国語国文学専攻科修了。

現在，神奈川県立厚木西高等学校に勤務。

近代日本文学専攻

「北村透谷の批評意識」（昭和32年度）

「青野季吉研究 ――昭和10年代における批評活動を中心として――」（昭和52年度）

「中島健蔵研究序説――戦前，戦中の批評活動を中心として――」（昭和58年度）

上記研究課題で，いずれも文部省科学研究補助金（奨励研究(B)）を受ける。

（現住所）〒257 神奈川県秦野市室町7-1

昭和文学の終焉―抵抗文学の系譜―

平成元年　三月一〇日　印刷
平成元年　三月二〇日　発行

定価　一、八〇〇円

著者　猪俣貞敏
発行者　三武義彦
印刷者　長澤信義

〒101 東京都千代田区神田神保町一―三七
発行所　株式会社　右文書院
振替東京二―一〇九八三八番
電話東京〇三(292)〇四六〇番

★造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、お取替えさせて戴きます。

Printed in Japan © Sadatoshi Inomata

ISBN4-8421-8903-7 C0095 ¥1800E

目次

一　人間存在の危機――青野季吉の再評価――……1

(1)　時代の重圧の中で――『ある時代の群像』をめぐって――……1

(2)　精神の危機――『古典への回帰』（昭和十年代後半期）をめぐって――……20

(3)　豊かさと繁栄、そして平和のもたらすもの――『文学五十年』をめぐって――……37

二　内部における敗退の歴史――中島健蔵『後衛の思想』――……79

三　静かなる眼光――黒島伝治の軌跡――……93

四　漂泊と文学――反俗の詩人・尾崎放哉――……115

五　近代と明治との重なり——猪野謙二『明治の作家』——……139
六　堕落という臆測——中野重治『鷗外—その側面—』——……161
七　抵抗の精神——野間　宏『暗い絵』——……179
八　政治と文学——チャタレイ裁判(伊藤整)と松川事件(広津和郎)——……203
初出一覧……210
あとがき……211

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一　人間存在の危機

――青野季吉の再評価――

(1)　時代の重圧の中で　――『ある時代の群像』をめぐって――

㈠　はじめに

日本のプロレタリア文学史上に大きな足跡を残した青野季吉のみずみずしい評論活動が、「心霊の滅亡」（大一一・五「新潮」）から始まって、「現代文学者の階級的性質」（昭三・一「改造」）頃で終り、以後青野の内面で傍観者への変貌があり、時代の重圧の中で批評性と傍観性の分裂が起こり「心霊の復活」（昭一五・三「文芸」）によって、批評性が傍観性にとってかわった（草部典一、昭三六・一「国文学」）といわれている。きわめて手際のよい外側からの青野論であるけれど、私はそのような手際のよい分析からははみ出している内側からの青野のもつ混沌とした、「動揺離合」そのものの中から、昭和という時代における青野的な典型のもつ思考の生産性について考えてみたい。

(二) 青野季吉の生い立ち

かつて青野季吉は「昭和二十二年に望むこと」という雑誌「人間」のアンケートの中で「行くところのない子、家のない子、仕事のない人、めしのくえない人、病気しがちで働けない人、老いて救いのない人、精神のよりどころのない人、そういう『ない』人達が『何かある』ようになって欲しい」と答えたことがある。それは戦後の混乱の中で、文学の「道づれ」「同伴者」として五十年の歳月を、「人間革命・人間の超克」に文芸評論がどれほど役立つかを絶えず問いつづけてきた在野の評論家として、的確な答えではなかったかと思う。

「何故わたくしは批評を書き続けたか」というサブタイトルをもつ自伝的随想である「未完成自画像」(昭二五・五「群像」)を強く貫いているものは「時代への人間的な義務といふ観念と情熱」である。青野によればそれを導いたのは、酒造業・廻船問屋を営んでいた「維新後の一種の新興ブルジョアジー」の没落と、貧困から生まれたものであった。没落は青野にそれに触れたくないという「回避心」「怯儒のこころ」という性情をうえつけ、貧困は、その見るに堪えぬ極貧から、本能的な反発と憎悪を呼びさまし、社会主義へとかりたてていったのであった。早く両親を失った青野が、子供のない極貧の老漁師の家にあずけられ、深い孤独感と共に彼等老夫婦のこの上ない愛情の中ではぐくまれたことは、人間の善意と愛情とがこれからの青野の生涯の暗い断層を埋めていくものとなっている。後年青野が政治運動に対して、人間的見地から疑問を持つようになる素地は実にこの極貧の中における老漁師の愛情だったのである。この愛情が、青野の社会悪に対する憎悪の念に、ある曇りを与えたことは注

意しておいてよいことと思われる。

青野の生涯の中で最も大きな影響を与えた市川正一の、非転向の故に敗戦を目前にしてなぶり殺しにされたその生涯と比べる時、私は生い立ちというものが有形無形のうちにその人間形成の上に、どんなに深い影響を与えるものであるかということを感ぜずにはいられない。山辺健太郎の「市川正一の生涯」（昭二九・三「前衛」）によれば、市川は、父正治が巡査のために転任の多いことから、物心つくようになると祖父のもとにひきとられ小学校に通ったといわれる。祖父七郎は「維新ののち山口県佐波郡中関村大浜三の所で塩田の経営」をしたが、かつては幕府の長州征伐の時に長州側に立ち、郷土を防衛したという革新思想の持主であった。当時の塩田経営は一種の借地農のようなもので、その中で「なにごとについても革新的な考えをもつ祖父のもとですごしたということは未来の革命家の生涯に深い影響をあたえた」といっている。青野没後、鈴木茂三郎が「私が市川正一君と青野君と『国際通信』の編集室で会った当時の印象からいうと、市川君に比べて青野君は感傷的な性格を持っていたことが思い出される」（「法馬子・青野季吉」昭三七・一二「文芸」）といってるのもこの一面を裏づけていはしないだろうか。

没落と貧困からくる孤独感。そこに生まれる「孤独と人間愛」――これが青野を人一倍批評的にした条件の一つであるが、もう一つ、自然主義文学との出会いにより「醒めた人生」「幻滅の悲哀」によって、少青年の夢を破られ、醒めた眼によって「批評的な意識を高ぶら」せたことは、青野自身語っている通りである。これと後年の革命家市川正一の生い立ちと生涯を比較してみると、文学を「道づれ」とした曲折の多い五十年の「動揺離合」

をつづけた青野の生涯の特色は、単に文芸批評だけでとらえることは困難のように思われる。評論だけでなく、随筆と自伝と小説とによってそれらを相互に補い合い関連させながら、絶えず自己と対決してきたところに青野の文芸批評家としての特色があるとすれば、評論家青野季吉は、随筆、自伝を含めた小説家としての青野季吉が検討されることによって、評論の意義も補われつつ、やがて昭和文学史のなかに正当な位置づけがなされるのではないであろうか。そういった観点から、これまで全くかえりみられなかった青野の小説に視点を据えて二、三の覚書を記してみたい。その前にもう少し青野の特色ある文芸批評家としての生い立ちをさぐっておきたいと思う。

(三) 孤独と人間愛

青野について語ったものの中でも特色ある「人間青野季吉」(保高徳蔵、昭三六・九「新潮」)などをみると、怒りっぽい、我儘で身勝手な一面が善意に語られているけれど、それをそのまま出せるのは小説をおいて他にないだろう。「批評とはおのれを語ることだ」という名言は、小林秀雄にしてはじめて可能なことであって、普通、批評という行為は、その選択した対象に大きく左右され、制限されているものだ。だから批評における自由は、その対象のもつ制限内での自由といってもいいだろう。その制限が殆んど意識されないほどの対象を見出すということは、よほどの強靭な意志に加えて、環境、時代、批評家としての成長の年代等における幸運さが伴わなければ困難なことのように思われる。私はその稀有な例を小林秀雄と宣長の出会いにみている。講談社版『現代日本文

学全集』が青野と小林とを合わせて一巻にしているのは、なかなか興味ある編集である。

小林がその鋭い文学的感覚と、その対象に情熱をもって自己を全投入し、対象に共感をもちつつ自己の所信を語りつづけていくところに対象の制限などのありうるはずがない。と同時に、それが戦前戦後にわたって小林に転向をもたらさなかった一つの理由であり、したがって、戦争の傷痕を残すことのきわめて稀な評論家であったゆえんでもあろう。それに比較すると、青野の「動揺離合」の航跡には、いつも時代と、青野の批評家としての年代のずれがあった。自伝『一つの石』、小説『ある時代の群像』、戦中の『日記』、小説「心輪」、自伝「私の社会人交友録――じつは非交友知人録」「未完成自画像」『文学五十年』それに、風土記『佐渡』を加えてながめると、青野の生涯には、例えば「正統派のプロレタリア文学者たちよりも一廻りも一廻り半も、年の多かった」こと、そのため正統派の大多数が昭和十年プロレタリア文学運動の終りに体験したところを、その運動のはじめに経験していたことになる（荒正人編『近代日本の良心』）といった断層がいたいたしいほどのつらさで私に迫ってくる。

青野の文芸批評家としての位置を確立したといわれている「『調べた』芸術」や「自然成長と目的意識」（大一五・九）などは、いずれも一九二五年（大正十四年）から二六年にかけて発表されたもので、それ以前の青野は、市川正一兄弟や平林初之輔などと共に、山川均、堺利彦などと交渉をもちながら、政治活動に入り一九二二年には第一次日本共産党に入党し、一九二三年六月の党首脳部の検挙による弾圧を経て、翌二四年党再建のため日本ビューローの一員として上海に行ったが、帰国後間もなくビューローを脱退、以後党との関係を断った。この間の事

情はまだ殆ど論じられていない。が、青野の文芸批評家としての出発が政治から文学へという事実上の転身の上になされていることは注意すべきことと思われる。青野によれば「『根本の理由』といえばこういう地下的な仕事に追い立てられている間の、自分の中に大きな空どうができた感じに一刻もたえきれなくなったから」(『文学五十年』)であった、勿論この「大きな空どう」の一因に生い立ちの諸条件がからんでいることはいうまでもあるまい。年代のずれも勿論あろう。が、しかし、私は一九二三年六月の党首脳の検挙と九月の大震災による朝鮮人虐殺、亀戸事件等の震災テロルが、彼の心情に大きく作用している点に注意したい。次節でのべる『ある時代の群像』とともに。

市川はこの検挙と震災とをどのように受けとめたであろうか。彼の『日本共産党闘争小史』(『国民文庫』大月書店)によれば、一九二三年の六月検挙について「労働者大衆はこの検挙事件によって日本共産党の存在を知り、党にたいする漠然たる支持要求をつよめてきた」とのべる一方、「この検挙は日本の労働運動の指導を共産党からそむかせるのに全然役だたなかったわけでもなく、この後、九月の大震災における大反動とともに、小ブルジョア的指導者、改良主義者をますます右傾せしめ、腰をぬかさしめ、一般労働運動においては、社会民主主義の発生、またわが党内においてはかの解党主義の発生をたすけたのである」とものべている。青野の『文学五十年』によれば、「二、三回細胞会議に列っただけで、わたしとしてはなんの活動もしないその年の六月一日に、堺利彦、徳田球一、猪俣津南雄、市川正一など」が検挙され、「検挙をまぬかれたわたし達は当時新居格が学芸部長をしていた朝日新聞の応接間へ押しかけて、不安を隠して詳報を待ったり」したのであった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

つづいて起こった大震災はどうであろうか。大杉栄、伊藤野枝の死を聞いて、「容易ならぬ事態の態度の到来を全身に感じ、ゾッとして自分の身辺を見回すような気持になった」(『文学五十年』)青野は、朝鮮人虐殺、亀戸事件に「怒りに燃える気持を抑えかね」と回顧し、「この天災を踏み台として軍部支配の体制がようやく形成」されるようになったと指摘しているが、新聞連載による回顧録といった制限を考慮に入れても、なおかつその受け止め方は市川正一に比べると心情的なものに思える。それに比較すると市川は、この震災テロルを「ブルジョアジー」の「内乱鎮圧のための演習」と規定し、人民に対する弾圧とうらはらに、ブルジョアの利益のために震災手形補償法という「ブルジョアジー保護の略奪的な補償法案」をもうけたことを指摘しているのである。法廷陳述による党の宣伝をねらったものという点を考慮に入れても、青野の心情的な受け方に比して、市川の現実に対する見通しは具体的な個々の現実を再構成し、それに歴史展望主義的な思考を十分に働かせた上での受け止め方であった。

また、弾圧後の党再建問題についても、弾圧による党の解党後、つくられた「委員会」についても、敗北主義者が革命的な要求に表面的な妥協をするためにつくったものであるとし、さらに「革命的な一分派とまったく敗北主義的な武装解除的な解党主義の本流を代表したものが」混在していたこと、しかし、それがやがて「党の再組織の機関として実際にうごくようになった」ことを指摘している。この間の事情の詳細は今は省くが、それが一方的な正統派の論断であるとしても、なおこの論断の中に含まれる、危機意識による対立への契機を通して物事の本質に迫っていこうとする原初的な思考法を、私としては注目しておきたいと思う。青野は党再建のため日

本ビュウローの一員として上海におもむき、解党の誤りを認めて再建のために努めることを申し合わせるのだが、「いよいよ上海テーゼを実行する段になって青野と佐野とが突然ビューローから脱退」し荒畑寒村を憤慨させている(『寒村自伝』)。青野は脱退の理由を明らかにしなかったらしい。しかし、その理由は前述の「大きな空どうにたえられない」という一語につきると思われる。が、それは非常に空漠とした心情的な表現で、きわめてあいまいである。私が今問題にしたいのは、具体的に起こったきわめて重要な事柄を、こういった漠とした表現でしかとらえられず、しかもそういったあいまいな状態のままに突然脱退してしまうという、青野における思想の在り方そのものなのである。解党主義と非解党主義の部に「理論的にはげしく対立したというわけでなく、いわゆる情勢判断の食いちがいの程度だった」(『文学五十年』)といっている青野の思考の中には、もともと対立などというものはなかったのである。『寒村自伝』はその一つの裏づけと考えられるわけであるが、この対立の契機のない心情的な思考法はこの時突然生まれたものではなく、すでに小説『ある時代の群像』の中に求めることができるのではないかというのが次節における私の見解なのである。普通、青野の転向はこの政治から文学へというあたりに求められているけれど、市川の物事の本質に迫っていこうとする思考法と比較する時それは歴然とする。対象に対するさまざまな異論とつきあわせることによって、自己の内部にあるものを組み変え、発展させていく道をとざし、ただひたすらに自己の内部に語りかけることだけに限定しようとしたところに、政治から離れ、「孤独と人間愛」を語りつづける「温情あふれる」文芸批評家青野季吉が生まれたのではあるまいか。

(四) 青野における小説の位置

青野は評論を書くことと同じ重さで絶えず自己を語っている。青野の処女評論集『解放の芸術』(昭和元年)(以後すべての評論集に殆どといっていいくらい自伝に類する随筆が収められている)が、評論と随筆とが同じ比重で集められていることはすでに指摘されている通りである。これら一連の自伝的随筆は、青野の「どんな短い読書感想でも必ず読んで書いているのだから安心してもらいたいし、自分を論ずる人は単行本に収録されていない文芸時評といったものもみて論じてほしい」(『現代日本文学講座』小説6)との発言を思い合わせると軽くは読み流すことはできないものだ。まして〝自我形成史〟的な要素をもつ小説には、その完成度の巧拙はぬきにしても考えてみなければならないと思われる。

およそ批評するという行為はその対象となる創作の分析を通じ、それを媒体として己れを凝視することであろう。だからそれは己れを知るためにこそ他者を評するのだともいえよう。そして、その批評が、良心と正義感に加えて「文学者らしい心の弱さ、繊細さ、みずみずしさ、ういういしさ」(高見順「青野季吉日記を読む」)に支えられる時、他者への批評が自己の弱さへの鋭い凝視となることは当然考えられることであろう。そして、それはまた、信条を披瀝しながら同時にその空しさをも感ずることによって、そのむなしさを埋めあわせるために、自己をみつめ、ふり返り、自己を語ることにもなってくるのだ。他者を評することは、少なくとも青野の場合、それ

によって他者を切り捨てることではなく、他者と自己とを共に自己の内部で醸成させていく努力であった。それは鋭い感受性、純粋さだけでできるものではなく、その中にねばり強いしぶとさがなければ困難なことのように思われる。

他者について語る人は、本当は自己に忠実な点で心弱い人でなければなるまい。何故なら、自己に忠実な点で心強い人は、一切を紋切型に割り切ることのできる人であると同時に、他者の欠陥を見逃さないばかりか、あたかも自分にはそのような欠陥はないものの如くにふるまうことができるからである。そういう点で自己の弱さを知っていた青野は「批評のむなしさ」（高見順「日記」（一九）昭四二・五「新潮」）といったものをとらえていたであろうし、同時にそこから生まれる不安に敏感であったはずである。その不安に耐え自己をみつめ、自分にのしかかってきた運命的な岐路の選択の足がかりにすることは文学者青野にとっては必要なことであった。やがて政治的な運動から離れていく（昭和六年「労農」の同人会より遠ざかっていく事実をいう）その前年の昭和五年（一九三〇）に、ストライキをめぐって自己対他者、自己対社会問題との関係を描いた小説『ある時代の群像』の書かれる機は熟していたのである。

(五)　『ある時代の群像』覚書

青野にとって唯一の長編小説『ある時代の群像』は昭和五年十一月十五日、日本評論社から出版された。この『ある時代の群像』をめぐる時代と背景、市川正一の青野に与えた影響等さまざまな問題点があるが、ここでは

「遁世できずに市井で生き抜いた青野さんは、昭和の文学者のひとつの典型である」（高見順「青野季吉日記を読む」昭三七・一〇「文芸」）という、青野的な生き方の中で『ある時代の群像』について二、三の覚書を記してみたい。これは一九一八年（大正七年）ロシア革命鎮圧の意図をもって日米共同でシベリアに出兵するという時代的背景の中で、出兵反対だった読売新聞社が、軍部の圧力で突如出兵に賛成という社内情勢に不満を覚えた青野や市川が、首謀者となって行ったストライキを題材としたものである。

主人公春野義一はおそらく青野とみてさしつかえないし、「義一より一年遅れてP大学を出て、義一の紹介で、Y社に勤めるようになった」（P大は早大、Y社は読売新聞社―筆者注）三川は市川正一とみてよいと思われる。義一と三川は「日頃から同胞のような間柄」であり、三川には「いつもその風貌や態度のうちに、軽いユーモラスなもの、その言動に襟を正すような真摯さ」があり、「少しばかりの塩田を政府に買いつぶされてしまって、すっかり貧化した塩田業者」のせがれであった。ヒルティの『眠られぬ夜のために』を「いつも懐にしているアチック・フィロソファー」は、この騒動をへて次第に社会主義の研究に進んでいくことになる。

だがこのストライキは、軍国主義に対する文化主義の闘争というような、漠然たるインテリゲンチャ側の申し込みに、「アナーキストの組合で、原則上政治運動やインテリゲンチャを排斥」しているといわれる印刷部の人たちの応援が受けられず、しかも同志の密告もあり、遂に決行されず敗北に終ってしまったのである。かつて義一は友人に、

――今の社でどうしても我慢のできない不満があればやれるところまで戦ってみる。新しい道はそこから開

けるんだ。

といったことがあった。が、また第二次シベリア出兵に対する反出兵の民論をおさえるために、Y新聞社が軍閥によって買収される仮契約の成ったことを友人から知らされると、

——自分というものがそこに在る一つの石ころよりもつまらないもののように思えた。

のである。義一にはそういうところがあった。こういった重苦しい空気の中で、同僚が退社の決意をうちあけると、

——あなたの止したいと言う気持は、僕によくわかります。……与えられた環境でそこに見出された悪や醜と戦って、少しでも押し返すところにわれわれの生活の意義や発展があるのではないでしょうか。

とも答えている。やれるところまでやってみるといったかつての義一の積極的な姿勢は、ここでは「与えられた環境で」と「少しでも押し返す」という消極的な姿勢に変わってきている点に注目しておきたい。

シベリア出兵隊の中で取材にあたった義一は刑事たちに思想調査を受けたことがある。それを心配する妻や妹に、

——いまの僕は、あの社のことですら、家のことが気にかかって、多少卑屈になっているんだ。何でそんなことをするものか。第一そんな思想を僕は抱いていないし、その勇気もないよ。

といって苦笑するのだが、しかし「この出来事がこの場合義一の心に一種の軽い衝撃を与え」ているのである。そして再度、義一は「赤化士官」が本国へ移送されたが途中逃亡した事件とつながりがあるように疑われ家宅捜

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com